第３４９回産業事情検討会（10 月 16 日開催）公開セミナー

【現研 50 周年特別企画】

ロンドンオリンピック 2012 は英国社会をどう変えたか
2020 年東京オリンピックを素晴らしい大会にするための研究調査プロジェクト

㈱現代経営技術研究所　主任研究員グループ

プロジェクト・メッセージ：現研所長　大槻裕志

本年 7 月、現研は創立 50 周年を迎えました。2020 年の東京オリンピックを成功させるために現研もしかるべき役割を果たし貢献したい。そう願って創立 50 周年特別企画は、研究調査プロジェクト「ロンドンオリンピックは英国社会をどう変えたか」に取り組みました。

大成功と称えられているロンドンオリンピックも順風満帆に推移したわけではありません。2005 年 7 月 6 日に五輪招致成功。その翌日にロンドン同時多発テロ。開催前にはチケット販売が大混乱し、開会式直前にはシニカルな空気が充満していたと多くの人たちが当時を振り返ります。それでも終わってみれば英国人自身が納得する素敵な大会になりました。

みんなで知恵を出し合い、議論を重ねながら前進し、力を合わせて東京オリンピックを素晴らしい大会にしましょう。当研究調査には、そのためのヒントと手がかりが満載しているものと自負いたしております。本日は、私たちのプロジェクトの成果を惜しみなくご提供できればと考えております。また、当研究調査プロジェクトをさらに進め本年 12 月 3 日の研究会にて東京オリンピックへの本格的な提言を実施いたします。

司会進行：現研上級主任研究員　大島和義

現研は 1964 年の東京オリンピックの翌年に創立され、爾来 50 年、東京を拠点として時代の先頭に立ってコンサルタント活動を展開してきました。また、1990 年の EU 発足を機に新たにロンドンに拠点を設けて活動を始めました。その初代所長をつとめたのが大槻裕志です。2020 年東京オリンピック開催が決まって、あらためて東京とオリンピック、ロンドンとオリンピックという２つの縁というものを強く感じています。東京オリンピックの成功に向けて懸け橋となれば幸いです。

大槻裕志、須賀健太、篠崎太郎、大島和義の 4 名は現地に直接足を運んで現場の空気を感じ、多くの関係者の方々とのインタビューを重ねてきました。2012 年のロンドンオリンピックが我々にとってどのような意味があるか、有用な情報は何かということを主眼にして話を進めてまいります。

Ⅰ．7 年間の五輪劇を英国はどう演じ切ったか

●ロンドンオリンピックを貫く２つのコンセプト ･････････････････ 現研主任研究員　篠崎太郎

英国は 1894 年の IOC 設立の初期メンバーでありロンドンでは 1908 年と 1948 年のオリンピックも開催されています。また、パラリンピック発祥の地として知られるストーク・マンデビル病院が英国にあります。リハビリとして始まったものが競技となり国際大会へと発展していき、それがオリンピック・ムーブメントに組み込まれてパラリンピックになっていくという重要な位置

づけになっています。ロンドンオリンピック・パラリンピックにはスタートから終了までを貫く2つ大きなコンセプトがありました。

1. Diversity & Inclusion－「ダイバーシティ＆インクルージョン」
2. Inspire ／Inspiration－「インスパイア／インスピレーション」

シンガポール・プレゼンテーションでは、ロンドン社会が非常にグローバル化が進んでおり、沢山のエスニック・マイノリティを抱える中で人々が共存している都市であるという点、その多様性の中での共存精神というもの、また、「200のコミュニティと300の言語」というフレーズを通じて「ダイバーシティ＆インクルージョン」のコンセプトのイメージを伝え、「インスピレーション」というフィルムではアフリカ、アジア、イギリスといった世界中の子供たちがスポーツによってインスパイアされる、鼓舞される、「自分もスポーツをやりたい」と感じるシーンを映しています。ロンドンが世界とつながっているという「ダイバーシティ」を伝え、そして「ロンドンが世界中の子供たちをスポーツにインスパイアする」という強い意志を表現したのではないでしょうか。

●ボランティア募集　－Become a London2012 Games Maker ･････････ 現研主任研究員　須賀健太

2010年9月16日、ボランティアの募集を開始します。7万人の採用枠に対して24万人の応募がありました。「ロンドン 2012 のゲームズ・メーカーになろう」というキャッチフレーズで、ボランティアは Games Maker と呼ばれ、ゲームをつくるのはボランティアなのだという考え方を打ち出しました。オリンピック組織委員会はこの言葉を徹底して使いまくります。トレーニング中にも皆さんがゲームを作るんだ」、「皆さんがゲームを素晴らしいものにするんだよ」と言い続けました。みんなの気持ちがどんどん高まっていったと体験者のみんなが語ってくれました。これがボランティアの皆さんの写真です。お気づきでしょうか。若者から年配の方々まで。宗教も人種も様々。LGBT の方も。多様性ということを掲げて構成されています。

●ゲームズ・メーカー：ベニー・ベル氏　インタビュー ･････････････････ 主任研究員　篠崎太郎

彼女はゲームズ・メーカーとして参加して人生を変えるほどの大きな「インスピレーション」をうけて、現在、教師を定年退職してボランティア活動を本格化させています。インタビューした際の彼女の 1 週間のスケジュールをご紹介します。

5月 24日（日）　ボランティア活動（ローズ・クリケット・グランド）
25日（月）　ボランティア活動（ローズ・クリケット・グランド）
26日（火）　ボランティア活動（ホロコースト・エキシビション）
27日（水）　ボランティア活動（ホロコースト・エキシビション）
28日（木）　ボランティア活動（ローズ・クリケット・グランド）
29日（金）　ボランティア活動（ウエンブリースタジアム）＊ラグビーW杯研修
30日（土）　ボランティア活動（ロンドン・トライアスロン）

「こんなに楽しい、新しい人生が始まるなんで想像していなかった！」

●ＨＲダイレクター：ジーン・トムリン氏インタビュー ･････････････ 現研主任研究員　篠崎太郎

ロンドンオリンピック組織委員会の HR（ヒューマン・リソース）部門の責任者（ダイレクター）であるジーン・トムリン氏は、フォード・モーターからキャリアをスタートさせ、プルーデンシャル、マークス＆スペンサー、BBC などで30年以上のキャリアを積んだ HR のプロフェッショナルです。今回スカウトされてロンドンオリンピック・パラリンピック組織委員会の HR ダイレクターに就任しましたが、インタビュー中に何度も表現し

た言葉が「ダイバーシティ＆インクルージョンの徹底」です。「人間はみな、平等である。人種や立場、性別、年齢、宗教、障害の有無、LGBT といったことは関係なく平等であるべきである。多様性を受け入れ、オープンであり、同じ価値観・目的をもってこのプロジェクトに取り組む。そんなチームを創ることが自分の使命である」というものでした。言葉にするのは簡単ですが実際に 7 年もの長期にわたってやり続けることは大変困難なものであったということです。

●開会式の大成功が皆に自信を与えた ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ **現研主任研究員　須賀健太**

大きな不安の中でオリンピック開会式を迎えます。ところが、それが素晴らしい感動的な開会式になった。ボランティアも素晴らしかった。「ロンドンオリンピックはいけるぞ」という自信をみんなに呼び起こした開会式になったのです。これを演出したのがダニー・ボイルです。そして、8 月 29 日、パラリンピックが開幕。開会式では満席の観客がものすごい拍手で史上最大の選手団を迎えます。GRAEae という障害者のための劇団のアートディレクターで芸術監督のジェニー・シーリーがこの素晴らしい開会式を演出しました。「パラリンピックもいけるぞ」というムードがいっぺんに広がっていきました。

ーボッチャ日本代表：廣瀬隆喜選手：インタビュー

「自国選手が出ていなくても良いプレーや勝敗が決まった際など、大歓声を上げてくれる。2008 年の北京大会では目的の選手のタイミングの時だけ見にきて終わるとスーと引き上げていく印象だったが、ロンドンでは、いつも満員の観客のなかでプレーができました。」

Ⅱ．英国の現地調査に基づく報告と現研分析（抜粋） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ **現研所長　大槻裕志**

ダイバーシティ＆インクルージョンというコンセプトをどういう社会的文脈の中でとらえるか、また、国家的な文脈でとらえるかということを見ていきたいと思います。

１．多様化を生む歴史と政治力学

サッカーでもラグビーでもイングランド、スコットランド、ウエールズ、北アイルランドと別々に参加します。それぞれが「国」と呼んで参加するというアイデンティティです。ロンドンにいた時のことですが、スコットランドで独立したら国家元首はどうなるのかと尋ねたところ立憲君主で構わないということでした。つまりエリザベス女王を国家元首にするということは当時のスコットランド国民党の方針でもあったのです。自分は United Kingdom の国民でありながらスコットランドの人間でもある。「独立」は YES か No の「分離」ではない。そのぐらい英国のアイデンティティは多元的なのです。

２．ＥＵ加盟国としての権利と義務

これが多様化にドライブを掛けます。相手が EU 市民であればロンドンで就業することを止めることはできません。私が人材を募集して資格要件にブリテイッシュ・ナショナリテイをあげた際、担当者が EU のルールで書けないと言われた経験があります。2005 年－2006 年の流入人口データでは 1 位ポーランド、2 位インド、3 位オーストラリア、4 位パキスタン、5 位ドイツ、6 位南ア、7 位アメリカ、8 位中国です。英国は二重国籍を認めているのでますます入ってくる傾向があると思います。

３．インクルージョンとロンドン 2012

「インクルージョン」は物事を含めるという意味です。ブレア政権が資本主義でもない、従来型の社会主義でもない、「第3の道」を掲げていた中で「インクルージョン」という概念が出てくるようになりました。例えば、高齢者の孤独死はインクルージョンされていないから誰も知らない間に亡くなっているということになります。「我々は社会の中の一員として全員が含まれなければならない」という理念で、オリンピックの理念でもありパラリンピックを推進する上でも非常に親和性が高いもので、ロンドンオリンピックの中で徹底し

て主張し続けます。LOGOG（ロンドンオリンピック組織委員会）は理想主義的にインクルージョンを追求しました。

４．英国が発明した“カルチュラル・オリンピアード”の真の意味とは何か

2008 年から文化のオリンピックを始めたということですが、これは英国が発明した考え方です。昔はオリンピックに文化競技があって詩の朗読や彫刻を掘るという競技に順位をつけた。それで「クーベルタン男爵は本当は文化のオリンピックもやりたかった」と決めつけて、ロンドンでそれをやろうという流れになった。英国の演劇界では「創造的解釈（Creative of Reinterpretation）」という言葉がよく出ますが、まさに「カルチュラル・オリンピアード」は創造的解釈で作り上げられた概念だと思います。文化国家のアイデンティティの中で文化関係者が一斉に動き出したのです。

５．ワールド・シェイクスピア・フェスティバル

ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーは王立の劇団でエリート中のエリートと言われています。キラーコンテンツはシェイクスピアですが、私が注目したイベントがあります。それは、前芸術監督であるマイケル・ボイラー氏が「もともと演劇というのはプロとかアマとかはなかったはずだ」と言って、ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーの母体であるロイヤル・シエイクスピア劇場とスワン劇場でアマチュア劇団に協力して上演してもらうということをやりました。素晴らしいのはフェスティバルが終わってもアマチュア劇団との取り組みを続けていることです。これこそが我々がやらねばならないことだと思います。

６．Unlimited Festival の成功

障害者の方々の障害者アートを取り上げることを包括して Unlimited と呼んで展開しています。Unlimited Festival は継続して今でもやっていますが、面白かったからまた行ってみようと思わせるもので集客力がとても高い。日本でやる場合には適切な言葉を見つける必要がありますが、いずれにしろカルチュラル・オリンピアードにおいて Unlimited はすごく成功しました。

７．オリンピック開会式の勝利－国民へのメッセージ、世界へのメッセージ

ダニー・ボイル演出の開会式は本当に恐ろしいほど良くできていると思います。世界に向けては“Showcasing UK”－「UK のショーケースを作る」を掲げて女王陛下、007、ベッカム、ラトル、ミスタービーン、最後はポール・マッカートニーを起用しました。そして国内には自画像を再定義しました。産業革命です。産業革命のダンスは非常に面白い。産業革命が巻き起こした黒煙とか、国民をこき使ったことなどをきちんと描いて負の歴史にも足を踏み入れている。素晴らしいと思います。

スタジアムの建設に携わった労働者たちも行進に参加しています。また、福祉国家だということを NHS ホスピタルのダンスで表現しています。英国の価値ということを表現しているのです。ドリーン・ロレンスという女性がオリンピック旗をもって入場しました。ジャマイカ出身のこの方は息子さんが殺されたのですが警察がまじめに捜査をしてくれなかった。人種差別によるものです。また、加害者が白人の有力者の息子で捜査をわざと遅らせた。長い間、警察と闘い続けて最後に勝利します。今は貴族院議員になっていますが、開会式でそういう方に旗を持たせる。成熟した大人の国ともいうべき演出だったと思います。

Ⅲ. 現研の提言と討議（抜粋）

シンガポールのプレゼンテーションが、ロンドンオリンピックの最初から最後まで貫かれ、全部を通して一貫性をもったと思います。

日本は、「ブエノスアイレズでのプレゼンテーション」によって招致を勝ち取った時の原点に戻るというこ

とを続ければ必ず良い結果が出ると思います。日本国民に感動を与えたあのプレゼンテーションには 2 つのことがあると思います。1つは「震災復興」です。高円宮妃殿下が世界に向けて御礼を述べられました。そして、佐藤さんの、スポーツが生きる希望を与えてくれ、それが震災復興にもつながったというスピーチです。もう1つは「おもてなし」です。この2つのことに立脚して進めば必ず良い方向に進むと思います。